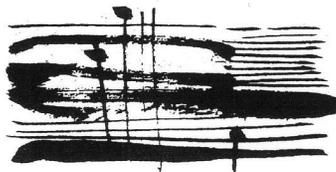


# 展 望



山元 眞

「癒(いや)し系」がもてはやされてきている。何でもかんでも「癒し系」で売り込まれ、それが結構受けている。それだけ人々は病み、社会は傷ついているのだらう。人々はいまだかつてないほど、癒されることを求めている。キリストの福音には真の癒しの力があり、教会は癒しの場である。

## みことばの力

昨年八月に受洗した方が亡くなった。会社で重要なポストに就き、仕事が生きがいだった。神なんかいな

い、と言いながら真しに生きてきた方。曲がったことが嫌いで誠実に生きていた。すべてにおいて段取りを大切に、そののない生き方をされていた。三年前から、がんとの闘いが始まる。仕事もできなくなっていく。闘いながらも病を受け止めていく。妻と共に。信者である妻は夫の受洗を望むが、夫は受け付けない。すべてに時がある。八月に洗礼、堅信、聖体の秘跡を受けた。ベッドの上に正座し、

# いやしの福音と教会

「お願いします」という一言に力がこもっていた。長い時間をかけてキリスト教の要理を勉強したわけではない。しかし、彼はキリストのみことばを通してキリストに出会い、すべてを神にゆだねた。亡くなる一カ月前、ホスピスに転院した。彼の死の準備が始まった。家族一人ひとりに手紙を書いた。葬儀の後、読むようにと。最期の一週間前から何も受け付けなくなった。ただ、妻が作った氷だけはおいしく食べた。その氷は

ルルドの水を凍らせて作ったもの。それをカリカリと音をさせながら口の中で溶かし、食べた。痛みはひどくなった。口から吐いたものを自分の手に取り、「キリストもこんな苦しい」とつぶやいた。「痛い」とも「苦しい」とも一言も言わなかった。眠るために睡眠薬の投与が始まった。「今回で最後です。これを飲めばもう意識は戻らないでしょう」といって看護婦の言葉に、彼は「お願いします」と答えた。痛みは苦しんだが、永遠の安らぎに入った彼の顔は美しく輝いていた。仮通夜の席で長男がつぶやいた。「神などいない、神なんか信じないと行って宗教をばかにしていた父が洗礼を受けるなんて考えられない。奇跡だ...」。神のなさることは、人知をはるかに超え、すべて時宜にかなって美しい。それを見る人々は感動し、そして、神をたたえる。

## 教会共同体の力

みことばには力がある。福音は神からのよい便りであり、それは人々を癒し、力づける。教会共同体にはそれを伝え、証(あか)しする使命がある。しかし、実際、教会は癒しの場、救いの場になっているのだろうか。病める者の集い、癒された者の集いになっているのだろうか。病人のために来られたキリスト、仕えるために来られたキリストとの出会いの場になって

いるのだろうか。形にとらわれ過ぎていないだろうか。権威や体裁を守ることが優先されていないだろうか。みことばに触れるにつけ、福音と教会共同体とのギャップに悩む人が多いのが現実ではないだろうか。その声に耳を傾ける余裕さえない。

## 目を向ける方向

教会は共同体の内側にだけ目を向けているのではないか。また、それ

を求め、それで満足しているのではないか。それでは行き詰まってしまふ。息が詰まってしまふ。神は、共同体のワクを越えて働いておられる。それに気付き、それを証していくのが教会ではないだろうか。人々を励まし、癒し、ゆるしてくださる神の愛を伝えていくのが教会ではないか。神の愛は「すべて」を包み込む。「すべて」には例外はなく「すべて」である。真の癒しは福音にある。福音はよい便り。それを聞き、それに出合つ人に喜びを与える。ひどい苦しみの中にあっても希望と慰めを与える。福音の裏には「よここび」である。それが宣教の原動力になる。この癒しの時代にあってもなお、福音を伝えることができないように見えるのは、そこに、喜びがないからではないか。みことばを現代社会の人々に正しく翻訳して伝える。そうすればキリストの福音を信じない人はいない。先の方の通夜、葬儀に参加した人たちが言った。どうしたらカトリックになれるんですか。(福岡教区司祭)